

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	木戸 みなみ	指導教員 (主査)	高橋 稔

論文題目	社交不安場面特有の認知的フュージョンが人前におけるパフォーマンス不安に及ぼす影響
------	--

本文概要

【問題と目的】 社交不安症 (Social Anxiety Disorder ; 以下 SAD) の治療法として、近年、Acceptance and Commitment Therapy (アクセプタンス&コミットメント・セラピー ; 以下 ACT) が注目されている。本研究では、ACT の概念のひとつである「認知的フュージョン (cognitive fusion)」に注目し、人前におけるパフォーマンス不安に認知的フュージョンがどのように関連しているのかを検討する。その過程で社交不安場面特有の認知的フュージョンを測定するための尺度の作成を行う。

【予備調査】 **方法** 調査対象および手続き 2017 年 7 月、大学生を対象とした集団式の質問紙調査を実施した。133 名 (男性 42 名, 女性 91 名, 平均年齢 19.26 歳, $SD = 0.87$, 有効回答率 91.72%) を分析の対象とした。**調査材料** ①フェイス項目, ②社交不安場面における認知的フュージョン尺度, ③CFQ (認知的フュージョン), ④SPS (人前でのパフォーマンス不安), ⑤自由記述項目 **結果** 因子分析 (最尤法, プロマックス回転) の結果, 1 因子構造となった。作成した尺度は十分な内的整合性を有した ($\alpha = .93$)。相関分析の結果, 作成した尺度は CFQ との間に $r = .68$ の中程度の正の相関, SPS との間に $r = .84$ の強い正の相関を示した (共に $p < .001$)。

【本調査】 **方法** 調査対象および手続き 2017 年 9 月、大学生を対象とし、集団式の質問紙調査を実施した。457 名 (男性 93 名, 女性 364 名, 平均年齢 19.70 歳, $SD = 1.24$, 有効回答率 92.89%) を分析の対象とした。**調査材料** ①フェイス項目 (年齢・性別), ②社交不安場面における認知的フュージョン尺度, ③CFQ, ④SPS, ⑤RRQ (反すう), ⑥BADS-SF (行動活性化) **結果** 項目分析の結果, 2 項目に床効果が見られたため除去した。残りの 13 項目を対象に因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った結果, 2 因子構造 (【認知的フュージョン】, 【観察するという視点の欠如】) となった。作成した尺度は十分な内的整合性を有した ($\alpha = .89$)。相関分析の結果, 社交不安場面における認知的フュージョン尺度は CFQ との間に $r = .63$, RRQ との間に $r = .58$, BADS-SF の下位尺度【回避】との間に $r = .45$ の中程度の正の相関, SPS との間に $r = .71$ の強い正の相関, BADS-SF との間に $r = -.39$ の弱い負の相関, BADS-SF の下位尺度【活性化】との間に $r = -.16$ の非常に弱い負の相関が見られた (全て $p < .001$)。共分散構造分析の結果, 仮説のモデルは当てはまりが悪く, 各変数を下位尺度ごとに分け, 詳細に構造を検討を行った。反すうが高まることで【認知的フュージョン】と【観察する自己という視点の欠如】の高まりや, 回避行動の増加がもたらされ, その結果, 人前におけるパフォーマンス不安がもたらされる可能性が示唆された。

【考察】 本研究によって, 社交不安場面における認知的フュージョンと回避行動の双方が SAD 症状の増悪に影響をしていることが推測された。本田他 (2015) の研究でも, ACT の精神病理の維持・悪化プロセスの中心として認知的フュージョンと体験の回避を想定していることが示されており, これらに介入することで, 症状の軽減ができる可能性がある (例えば, 三田村・武藤, 2015)。今後はさらなる実証的研究が求められる。

【主要な参考文献】

嶋 大樹・川井 智理・柳原 芙美佳・熊野 宏昭 (2016). 改訂 Cognitive Fusion Questionnaire 13 項目版および 7 項目版の妥当性の検討 行動療法研究, 42, 73-83.